

図書館通信 —57—

1981. 10

館長新任に際して

附属図書館長 細井寅三

附属図書館が増築され今日の姿に面目を一新してからすでに3年余が経過し、着々と充実発展への地歩を固めつつありますが、その期にあつてみごとに責を果たされた豊川前館長のあとを受けて、はからずも私がその大役を仰せつかることになりました。これまでは農学部建物からサッカー場越しに眺めてきた図書館でしたが、これからは図書館に足を運んで内部を勉強し、そして内から外を眺めなければならない立場に変わりました。農学部と図書館の往来を始めてはや2か月、まず、静大図書館の発足から今日までの足取りを知るから取組みました。図書館の机に向つて、改めて眼を通した「静岡大学25年史」の図書館に関する記載や、創刊号から今日までの「図書館通信」などは、その目的を叶えるうえで恰好な資料でした。幸いにして石塚館長以後、歴代の館長とは個人的に親しくしていただき、その間のご苦労ぶりの一端を見たり聞いたりしてはきましたが、それらの資料を通して、改めて歴代館長をはじめとする関係教職員の並々ならぬ努力が、今日の図書館をつくり上げていることを思い知らされたしだいでした。永年にわたる諸先輩のたゆまぬ努力の賜物を引継ぐ責任の重さを痛感しております。

さて、大学図書館はいま、1つの変革期に直面していると云えましょう。周知のとおり、昭和55年1月に出された学術審議会の学術情報システムに関する答申の線に沿って、大学図書館は共同利用の体制に向けて大きく動き出しております。すなわち、拠点大学に対する自然科学系外国雑誌の分野別集中購入、全国国立大学に対する集中化促進のための自然科学系外国雑誌の購入、人文社会科学系分野における大型コレクションの購入、全国国立大学図書館間の相互利用化の実現などが、それへの対応として進められています。更に、東

海地域では学術情報システムの地区中枢センターとして、昭和56年度中に名古屋大学図書館に大型コンピューターが導入され、57年度当初からその機能を開始する運びになっています。そして、それを中心にした周辺大学のシステム化が早晚実現されることになるものと思われれます。そのようなネットワークの形成に向けて、本学図書館も乗り遅れないよう早急な検討が迫られております。また、他方では、視聴覚時代に対応した新しい図書館の在り方の一面も検討してゆく必要があるように思われれます。

とは申しましても、大学図書館は、飽くまでも各局部における教育・研究と学生諸君の学習の手助けをする奉仕機関であります。大学全体の発展の歩みの中で、調和のとれた図書館の発展を画してゆくべきものと考えております。その基本に立って、永年の懸案事項である、いわゆる「図書館の基本問題」についても改めて見直しを行い、図書館内外間の理解を深めて、相互に納得のいく線での運営に努めてゆきたく思っております。

どうか図書館に対する忌憚ないご意見をどしどしお寄せ下さることを願っております。よろしくご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。
(1981. 9. 5)

もくじ

館長新任に際して.....	1
「国立大学図書館間相互利用実施要項」 について.....	2
静岡大学における文献複写・相互貸借 の状況について.....	3
〈私のすすめたい本〉 シェイクスピアと能.....	4
人さまざま.....	5

「国立大学図書館間相互利用 実施要項」について

国立大学図書館協議会「図書館相互協力」調査研究班は、「国立大学間における図書館相互利用制度の整備について」をテーマに、昭和54年度より研究討議を重ね、昭和56年6月に東北大学で開催された「第27回国立大学図書館協議会総会」に報告書を提出した。総会では、この報告書の内容について討議した結果、相互利用制度発足のための実行委員会設置等の内容について、さらに検討することとし、その取り扱いを理事会に付託することとした。その後、理事会で検討を重ね、本年6月に琉球大学で開催された「第28回国立大学図書館協議会総会」に標記「実施要項」と同「細則」が提案され決定された。

国立大学図書館間相互利用実施要項

1. 目的…この要項は、国立大学に所属する研究者の研究・教育活動に資するため国立大学図書館に所蔵されている図書館資料の円滑な相互利用を促進することを目的とする。
 2. 対象…この要項は、国立大学図書館協議会に加盟している大学図書館間における研究者による相互利用に対して適用する。
 3. 定義…この要項における用語の定義は、次のとおりとする。
- (1)国立大学図書館：各大学において附属図書館を構成する中央図書館、分館、部局図書館・室等をいう。
 - (2)研究者：国立大学に所属する教職員、大学院学生及びこれに準ずる者をいう。これに準ずる者は、その者が所属する大学の附属図書館長が認める者をいう。
 - (3)相互利用：研究者が他国立大学図書館に向向いて、その所蔵資料を直接利用することをいう。
4. 相互利用の範囲…相互利用の範囲は、館内における閲覧を原則とし、その方法は当該大学図書館の定めるところによるものとする。
 5. 相互利用の手続…相互利用を希望する研究者は、あらかじめ所属大学の図書館長に申請し、「国立大学図書館間共通閲覧証」の交付を受け、利用時にこれを利用受入館に提示するものとする。「共通閲覧証」の様式は別に定める。
 6. 相互利用の制限…利用受入館は、当該大学に所属する利用者の利用が著しく妨げられると判断した場合は、相互利用を制限することができる。

静岡大学における 文献複写・相互貸借の状況について

複写による資料の破損、特定大規模図書館への文献複写依頼の偏り、著作権その他の諸問題を含みながらも、文献複写は情報化時代と呼ばれる今日を反映し、増加の一途をたどっているといえる。そういった状況に対して静岡大学も例外であり得ず、特に受付件数に対して依頼件数の割合が圧倒的に多い中小図書館の常として、他の諸図書館に依頼、「お願い」する一方の昨今である。

以下、昭和55年度の文献複写等に関する諸統計と昨年比、更にコメントその他を加えることにより、本学相互利用状況の一端を報告し、又紹介も兼ねることが出来ればと思います。

1) 文献複写統計

注：外国への複写依頼は除く

区分		本館			浜松分館		
		人数	件数	枚数	人数	件数	枚数
依頼	学生	554 (147)	630 (141)	4,337 (122)	374 (129)	667 (122)	4,724 (92)
	教官	1,478 (168)	1,607 (158)	23,320 (120)			
受託	学内	1,395 (90)	2,204 (90)	12,968 (95)	248	379	3,567
	学外	579 (113)	688 (99)	5,830 (84)			

A. 昭和55年度利用統計 ()内の数字は54年度を100としたもの

2) 外国への複写依頼
(本館)

区分	件数	枚(コマ)数
学生	4 (80)	48 (20)
教官	232 (138)	5,909 (115)

3) 相互貸借冊数
(本館)

貸出	20冊 (250)
借用	197冊 (107)

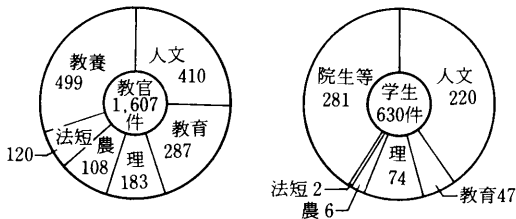
がって入手までの日数や料金の面での便宜さでは国内に及ばないが、主要各国図書館所蔵の文献の複写物を取り寄せることが可能である。

外国からの場合、複写物の入手に要する日数は後払いの場合3週間～2カ月位、前払いの場合は約倍の日数を要する。料金は1枚につき日本円にして約20～80円と国内とあまり変わらない。ただし最低料金制を採っている館が多く、枚数が極少ない場合でも一律1,000円前後支払う必要がある。更に送料が加わることや銀行へ海外向送金手数料として1回につき2,500円支払わねばならず、合計すると最低でも4,000円程と高価になる。又、校費で支払う場合は会計面での制約があり、毎年12月半ばで申込みを中止せざるを得ず、翌年4月の再開まで3～4カ月間の空白が出来てしまうのが残念ですが、止むを得ない現状です。

なお、今年度から外国への文献複写依頼の申込手続としては、依頼件数の増加や相手館の要請もあり前述のIFLAの申込書の様式に切り換えたわけですが、従来の毎回タイプによる手紙方式に比べ事務面でも合理化出来、将来の依頼件数の伸びにも対処しやすくなったと言えます。(IFLA申込書様式購入先: IFLA Office for International Lending, c/o British Library Lending Division, Boston Spa, Wetherby, West Yorkshire LS23 7BQ, Great Britain. 価格: 100枚綴1冊につき6ポンド)

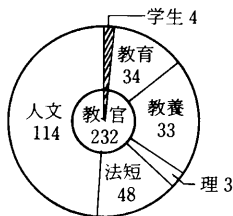
B. 学部別内訳 付コメント

1) 文献複写依頼—国内—



※ 今年の文献複写依頼の伸びは全体で件数にして5割増、枚数にして2割増となっているのはAの1)の表の通りであるが、教官については昨年に比べ、特に人文学部が約2倍、教養部が約3倍の伸びとなっている。学生についてはやはり大学院生等が圧倒的に多いが、これは学習の姿勢からして当然とも言える、学部生では人文学部が約2倍に伸びている。今後静岡大学における大学院の増設に伴いさらに一層の伸びが予想される。

2) 文献複写依頼—外国— 付コメント他



※ 外国への文献複写依頼も又順当に伸びているのはAの2)の表の通りであるが、学生の場合、今年は減少している。利用する学生が限られていることと、全て私費払いとなるので費用の点で断念することも多いようである。

外国への文献複写依頼は現在BLLD(英国図書館貸出部)へのクーポン券によって行うものと、IFLA(国際図書館協会連盟)国際貸出局の申込書の様式を用いて各国諸図書館に依頼するものと主に2つの方法で行っている。した

C. 文献複写受付・相互貸借—コメント—

Aの1)の表で見る通り文献複写の受付は昨年に比べるとやや減っている。当館に資料が必ずしも十分に揃っていないのと、人手不足や資料によっては教官の個人研究室に分散しており、依頼を受けてから発送までに時間がかかること、又学生の場合は図書館備付の資料についても複写料金(現在1枚につき40円)との関係で利用をあきらめる場合も見られること等が考えられる。

相互貸借についてはBの3)の表で見る通り、やはり借用が圧倒的に多いが、文献複写よりも伸びの率が低いのは、国内の書誌類がまだ不備で所在の確認が出来ないこと、学外、地域外への貸出を制限している図書館が多いこと、又貸出冊数も制限があることなどが原因と考えられ、大幅な伸びは今後しばらく期待出来ない状態にある。

こうした業務はあくまで図書館間相互の互恵を基礎として成立するものであり、本学においても自館の蔵書目録類の刊行や貸出に積極的に応ず

る姿勢が大学全体としても望まれる。貸出については昨年に比べて2倍半と増えているが、これは従来の貸出冊数があまりに少な過ぎたことと、研究室備付の図書等もある場合は無理を願って貸出に協力していただいたことによるものです。

(参考調査係 内線 268)

〈私のすすめたい本 40〉

シェイクスピアと能

宗 片 邦 義

夏休みに入ってまもないある日、自宅の郵便受をふとのぞいてみると、書籍小包が入っている。背面の2センチ程の穴から「麟」という字が見えた。私は一瞬胸の高鳴りを覚えた——「あゝ、今日は何ていい日なんだろう」思わずそうつぶやきながら急いで包みをほどくと、案の定、『福原麟太郎随筆選』という本が出てきた。全く思いがけなかった。福原麟太郎氏は今年の1月、86才で亡くなられた英文学者で、この本は、未発表の文章に、すでに発表された随筆の中から未亡人が特に選んだものを一緒に編んだ遺作集である。私は今年の夏休みは、この一冊の本を、毎日少しずつ、惜しみながら読む。

私の英文学との出会いは、たまたま高校時代に福原麟太郎著『英文学入門』という文庫本を手にしたときに始まる。大学に入学した年、この著者は定年退官されたので、受験日の数日前に行われた最終講義しか聞くことができなかったが、英文教室の中には、なお強く、氏の残照が感じられた。そんな中で私は、英文学とはシェイクスピアの詩劇を最高峰とする文学であって、これを音読するとき、言葉の不思議な魔術によって魂を虜にされることを知った。

その頃、私を日本の伝統芸術、特に能に導いてくれたのも、福原氏の著作である。また、フランスの文化使節団なるものが能を見て、「死ぬほど退屈した」と評したとき、福原氏は「能はこれを見て死ぬに値いするものだ」と反論したと聞いた。そしてその後、同じフランスの名優ジャン・ルイ・バローは、「私は能を見て、死ぬほど感動した」と語ったということだ。

さてこの数年、私はシェイクスピアの原文を能の手法をもって、国際的に理解されうる演劇として上演しようという実験を重ねてきた。そもそもこの試みは、今から8年ほどまえ、フルブライト研究員としてハーヴァード大学にいた頃、学生たちのために *HAMLET* の一部を仕舞風に演じたのがきっかけであった。つまり、ハムレットの第

一独白“O, that this too too solid flesh would melt,……”(「あゝ、この余りにも固い肉体が溶けてしまえばいい……」)を、着物に袴、白たび姿で、右手には舞扇をもって舞ったのである。場所はハーヴァード大学エマソン・ホールで、音楽学科のジョン・ウォード教授の求めによるものであった。

その後、マサチューセッツ大学やタフツ大学でも演劇学科の学生を中心にして、日英語併用の実験能『羽衣』を上演したり、また三島由紀夫の『近代能楽集』とかシェイクスピア劇の一部などを能の振付けで演じたりなどした。

帰国の途中、自分がそれまで日本で見たシェイクスピア劇はすべて欧米人の真似事にすぎない、何とか日本的なシェイクスピア劇がつかれないものかと考え始めた。やがて私は授業の一部で、アメリカの学生たちと同様の様々の実験を試みだした。世阿弥がその『風姿花伝』の中で、「一期一会」といい、「秘すれば花」といい、「初心忘れず」と言った能の精神と技法とをもって、シェイクスピアを解脱の芸術として舞台上に演じることはできないものか。昨年は英国ブリストル大学演劇学科のジョージ・ブランド教授を招へいして、3か月間、30名の学生諸君と“Noh・HAMLET”に取組んだ。学生たちは、能の謡いも仕舞も、シェイクスピアの原文も、これが初めてというわけで、土曜の朝、8時とか8時半に体育館うらの空手道場に呼び出され、私たち二人にしごかれることになった。やがて12月15日、市内の新通り能舞台で成果を発表した。実験としては成功だったし、見に来てくれた人たちの間でも好評だったようだ。演劇評論家の稲森道三郎氏が懇切丁寧な批評を寄せられ、学生たちは単位を取ってそれでおしまいではなく、ぜひ続けるべきだと励ましてくれた。だが、そういう殊勝な学生はついに一人もおらず、彼がやめるなら俺もやめるという連中ばかりだった。

私は学生相手ではなく一般市民を中心とする、より継続的な研究公演団体をつくることを思いたち、今年の五月、“Noh Shakespeare Group”を発足させた。現在メンバーは13名で、シェイクスピア劇を愛する小学校教師や高校の英語教師、学生時代から謡いや仕舞をつづけている人、早稲田小劇場の鈴木忠志の活動に傾倒してきた若夫婦とか、その他熱心なメンバーが集まっている。いつの日か国際的な舞台での公演を夢見ながら、ようやく五番立ての“Noh・HAMLET”の稽古に入り、夏休みには山の禅寺で合宿をしてきたところである。
(教養部・英文学)

〈私のすすめたい本〉

「人さまざま」—— Theophrastus

和田 清美

「私のすすめたい本」なる題で原稿用紙を渡されたが、ちょっと困った。私には「私の好きな本たち」はあるが、いま現在とくに「すすめたい本」が浮かんで来ないのである。そこで、好きな本イコールすすめたい本とは云えないが、二、三選んで紹介しよう。

Theophrastus 著「人さまざま」、岩波文庫本で私が大学生の頃買って今でも時々取り出すものの一つである。奥付けに昭和二十五年・第八刷とある。表題は訳者の吉田正通氏によるものだが、エチコイ・カラクテレス（道徳的諸相又は倫理的諸性格）の意識であり、実に的確に内容を把握、ずばり判り易い。内容は、人間の本性を様々な角度から観察し万人にもやさしく、洒脱に諷刺を交えて述べたものだ。また、ギリシャ時代の世相・風俗の一端もうかがえる。内容もさることながら、この「人さまざま」なる表現を私は好み、私の処世訓の一つとしている。時々そのページを繰って、一日の出来事や私自身の在り方について反省の糧としている。さらに私はこの「人さまざま」なる言葉をエコロジー（生態学）で云う「種の多様性—species diversity」と——自己流ながら——関連させている。これは、自然での生物群集における生物種の豊富さを意味する。豊富さは安定性につながる。適切な環境のもと、生物群集中で比較的少数の優占種がそれぞれの個体数において多くを占める一方、個体数は少ないが多様な生物種たち（いわば、少数民族）が必ず共存し、系全体の平衡が保たれる。もし外圍環境がよくなればそれだけ優占種への参加者が多くなり、自己促進的に多様性そのものが進化する。逆に環境が厳しくなる程、多様性は極限の破局へ向って減少して行く。私は大学内では特に「人さまざま」であってよいと思う。勿論、てんで勝手と云うことでなく、自然には自然での厳しいルールがあるように大学には大学のルールがあるべきことは忘れてはならない。少々脱線したが、この訳書の底本は「H. Diels (Recensvit)——*Theophrasti Characteres. Oxford Classical Text」であり、参考書とされた「J. M. Edmonds & G. E. V. Austen—*The Characters of Theophrastus. Loeb Classical Library」と共に附属図書館にある。テオフラストス (B. C. 372—287, 85 才で歿)

は、プラトンのアカデメイアに学び、そこでの先輩にあたるアリストテレスを第二の師と仰いだギリシャ時代の代表的哲学者の一人である。そして、アリストテレスの開学したリュケイオン学園（逍遙学派：Peripatetic School）の第二代学頭となり、緑樹の間を逍遙して諸学を講じたという。私自身植物学徒であるが、彼は植物学の祖とも云われている。テオフラストスは人間の本性を十分に観察し分類したが、それ以前に植物の諸特性をよく観察し記載している。彼の書は膨大だが、わが附属図書館の書庫でアリストテレス（評伝を中心に大書架に一杯つまっている）関係のものと同様では数冊に過ぎないが、その中の「A. Hort (ギリシャ語の英語対訳本) ——*Theophrastus, Enquiry into plants I 及び II. The Loeb Classical Library」に目を通すことが出来る。これは「植物の探究」とも訳せるが、その内容から彼が狭義の植物学のほか、農学・薬学を含む植物に関する諸学の父と称さるべきであろう。ここでは、地中海沿岸を中心として西アジアに分布する野生・栽培・水生植物など五百有余を挙げてある。現代の自然科学が、自然のうちに普遍する客観的法則性をわれわれのものとするに於いて発展して来たことでは、アリストテレスやテオフラストスによる自然の合目的理解の方向とはすれ違ふものの、われわれが五感を通じ直接に観察し記載できることは殆んどなされていることは当然とは云え驚きである。書中で見られる植物をめぐる様々な発想についても二千年を経た現在でも参考になることが多く、読んで興味は盡きない。これらの点は、生物学の祖と称されるアリストテレスについても同様である。岩波書店から昭和四十三年に出された「*アリストテレス全集(全十七巻)」も私の好きな本である。(附属図書館に二組、開架図書として一組ある)。この全集はなかなか読破するは難く、私自身もその中の「自然学・動物誌・動物部分論・動物運動論・動物発生論」などは読んだものの完読はしていない。自然系を含め人文系の学生諸君は、全集中の自然学小論集—「感覚と感覚されるもの・睡眠と覚醒・夢・夢占い・長命と短命・青年と老年・生と死について」、また小品集中の「人相学」、「植物について」などから読むのも面白いだろう。さらに、この全集の編集者である山本光雄氏の「*アリストテレス——自然学・政治学、岩波新書—黄版 21」をこれらへの入門書とされるもよい。

最後に一冊、「皇帝付数学者、故ヨハネス・ケプラーの夢、もしくは月の天文学に関する遺作、1634

年出版」(邦訳)一種の空想科学小説で、目下理学部四階図書室に眠って諸君が起してくれるのを待っている本なのです。(理学部・生物学)
——*は本館所蔵

全集・叢書に含まれる作品や 資料の検索方法

全集・叢書には、文学全集、個人全集、資(史)料集成など各種のものがあ、それらには、古典・文学作品、資(史)料などを中心として多くの資料が含まれています。

本館所蔵図書を探したい場合は、書名目録とともに著者名目録についても調べて下さい。また、見当らない場合、探そうとする資料が収録されていると思われる全集名を書名目録でひき、そこに記載されている内容細目をみていく方法もありますが、個人全集などわかり易い例を除けば探しにくいものです。

こういった全集・叢書の中に収録されている資料を探すための道具(=参考図書)が、刊行されており、本館には以下のようなものが所蔵されています。

全集・叢書細目総覧①は、明治以降に刊行された全集・叢書のうち、収録する資料の大部分あるいは全部が国初から幕末までのもので日本人の著作になるもの、約1,200点を対象としたものです。各全集・叢書の収録内容一覧と、書名の50音索引との2巻からなり、難読索引がついています。この総覧によって、探している資料が、例えば『群書類従』に収録されていることがわかれば、カード目録によって当館所蔵を調べて利用します。

同様のものに、**日本叢書索引②**があり、**国書総目録③**でも、どの全集・叢書に入っているかを探することができます。

以上は、明治以前の資料ですが、西洋文学で日本語に翻訳された作品を探す場合には、下記の④～⑥が役に立ちます。又、近年刊行のもので絶版になっていないものなら、出版目録ではありますが、**日本書籍総目録**がある程度(各巻の書名のみ)使うことができます。

＜紹介した参考図書＞

- ① 『全集・叢書細目総覧 古典編』国立国会図書館編 紀伊国屋書店 昭48-52 2冊 [027-Ko 49 参考]

- ② 『日本叢書索引 新版』広瀬敏著 名著刊行会 昭44 761, 91 P [081.039-H 72 参考]
③ 『国書総目録』森末義彰等編 岩波書店 昭38-51 9冊 [025.1-Ka 53 参考]
④ 『明治・大正・昭和翻訳文学目録』国立国会図書館編 風間書房 昭34 779 P [903.1-Ko 49 参考]
⑤ 『東京都立中央図書館蔵合集収載翻訳文学索引』東京都立中央図書館編 昭52 436 P [903.1-To 46 参考]
⑥ 『西洋文学全集翻訳目録 1956-1976 I, II』東京都目黒区立守屋図書館編 1977 2冊 [903.1-Mo 73 1-2 参考]

■図書館委員会報告

○昭和56年度 第3回 S.56.6.17

議事1 昭和56年度図書館経費について

昭和56年度図書館経費予算案を承認した。

2 その他

教育学部委員から大学院学生の書庫内検索について希望が述べられ、意見交換の後、まず図書館内部で検討し、それに基づいて次回委員会で再び審議することとした。

■図書館委員の紹介

昭和56年7月1日付で、農学部選出の細井寅三委員が附属図書館長に就任したため、その後任として岩川治教授が選出された。

■教職員著作寄贈図書(本館)

松田禎二(人文学部)

『知ることと信じること——哲学入門——』

稲垣良典・松田禎二共著 勁草書房 1981
(101/I 52)

近田文弘(理学部)

『静岡県の植物群落』

(静岡県の自然環境シリーズ)

近田文弘著 第一法規出版 1981

(472.154/Ko 78)

『南アルプスの森林植生』

近田文弘著 静岡大学理学部生物学教室

(652.72/Ko 78)

佐藤博明(人文学部)

『会計学の理論研究

—シュマーレンバッハの理論を中心に—』

佐藤博明著 中央経済社 1981

(679.01/Sa 85)

大畑専太郎(元静大事務官)

『詩集 狐の森』大畑専著 百鬼界 1981

(911.56/O 28)